

主体的に叙述に立ち返り、自分なりの解釈を説明することができる児童の育成 ～説明文の指導を通して～

目指す子どもの姿

説明文の指導において、教師が選んだ本文全体の一部の段落やまとまりを抜き出し、正しい位置を選ばせることによって、子どもが主体的に叙述に立ち返り、自分なりの解釈を説明することができる姿。

説明文の文章全体の構成を捉えて要旨を把握するのに有効な方法として、大森修氏が新潟大学附属小学校で形式段落ごとに順番をバラバラに提示し、正しく並び替えさせるものがある。「カブトガニ」で初めて用いたこの方法は、全国的に広く実践されるようになった。しかし、この方法は、5～7段落の短い説明文では有効なもの、10段落を超えるような長文の説明文では実践しづらい面がある。単純に考えて、10段落の並び替えでは10の階乗分あることになる。これを授業として組み上げていくのはかなり困難なこととなる。そこで、川上弘宜氏は、長文の説明文の中から、最初の段落、最後の段落、文章構成上重要な段落を4～5個提示して、その中から最初の段落及び最後の段落を選ばせる方法を取った（※参考文献参照）。この方法ならば、どんなに長文の説明文でも文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる。

これらの手立てで説明文を読ませることによって、どの子も叙述に立ち返り、言葉や内容のつながりを押さえた自分なりの解釈をする力を高めることができると思う。さらに、2実践目では、説明文を読んだ後、子どもたちに筆者の意見に対しての意見文を書かせた。説明文の要旨を十分に理解していれば、より筆者の意見について具体的な立場を示し、自分の考えを書くことができたと思う。

《参考文献》

- ・到達度を明確にした国語科の学力保障～小学5・6年生編 大森 修 監修・川上弘宜 著 明治図書
- ・学習指導要領国語編 東洋館出版社